

「かかる・かける」

成田 徹男

0. はじめに

動詞「かかる・かける」は、いわゆる多義語であり、しかもその多義性は非常に豊富である。本稿では、いくつかの手がかりをもとに、この二語の用法の分析・分類を試み、多義語を研究するための方法の模索にもつとめた。

多義語と同音異義語との区別は、実際には困難なこともある。また、多義性と単なる比喩や特殊な慣用的用法との間に、明確に一線を画すことも容易ではない。ここでは、多義語を、何らかの意味特徴を共有しつつ、互いに異なる意味特徴を有する二類以上の用法をもつ語、というように仮りに定めておくにとどめる。

「かかる・かける」は、国立国語研究所(以下、国研と略す) '64では、「2.1515 括え置きつり・掛けなど」に含まれている。いわゆる「設置動詞」である。本稿で対象としたものには、この他、「雇る」2.585(国研'64の分類番号、以下同じ)、「賭ける」2.371「かける(掛け算の意味)」2.3062がある。「欠ける」「駆ける」は、同音異義語と考えた。また、いわゆる接尾語の「-かかる・-かける」や複合動詞は、本稿では扱わないことにした。

1. 自他の対応

「かかる」は自動詞、「かける」は他動詞と考えられており、同一の事態を、「彼が壁に絵をかける。」とも「壁に絵がかかる。」とも言いあらわすことができる。この関係は、概略、

- (1) N_1 が N_2 ニ N_3 ヲ かける。 N : Noun(名詞)
 N_2 ニ N_3 が かかる。

のようにあらわされよう。これが自他の対応である。つまり、

格助詞「ニ」の前の名詞が両者一致し(N_2), 「かける」の格助詞「ヲ」の前の名詞と「かかる」の格助詞「ガ」の前の名詞とが一致する(N_3) という関係になっているのである。すべての用法に、この対応がみとめられるわけではない。以下の論述をみられたい。

この関係を格文法的に示すなら、 N_1 はA(Agent:動作主), N_2 はG(Goal:目標)あるいはPa(Participant:受け手), N_3 はO(Objective:対象) というようになるう。

N_1 にたつ名詞は、一般に有生のもの(多くは人間)であって、「かける」は、その N_1 の動作主の意志的な動作である。意図しない結果をあらわす場合(例えば「母親に心配をかける。’)もあるが、その時にも N_1 はその事態の原因/責任者である。また、「かける」は通常「〜ている」を伴って動作の継続/進行をあらわす。

一方、「かかる」は(N_3 を対象と呼びうるように) N_3 が有生であっても無意志的な動作をあらわし、「〜ている」(名詞を修飾する場合には「〜た」のこともある。)を伴ってある状態をあらわす。ただし、特異的な例外(「太郎が仕事にかかる。’)もある。

2. 用法の分類

多義性の粗描として、用例を大きくいくつかにまとめてみる。以下の例は次のような簡略表記で示し、できる限り多くの実例を提示する。資料としても価値あるものをめざした。

(1) (彼ガ) 壁ニ 絵ヲガ [(N_1 ガ) / N_2 = N_3 ヲ/ガ]

この(1)は、次のふたつの文を

(2) a. 彼ガ 壁ニ 絵ヲ かける。

b. 壁ニ 絵ガ かかる。

まとめて示しているものと読みとっていただきたい。対応のない場合には、(3), (4)のように示される。

(3) 山ニ 霧ガ

(4) 花子が 太郎ニ 思いヲ

(3)は「かかる」のみ、(4)は「かける」のみしか言えぬ例である。

また、語順が自由でない例があり、その場合には、上のよう
な順序では示していない。

2. 1. <設置>

- | | | | |
|----------------|--------|---------------|-------|
| (1) (彼ガ) 壁ニ | 綫ヲガ | (11) (彼ガ) 火ニ | やかんヲガ |
| (2) (彼ガ) 玄関ニ | 提灯ヲガ | (12) (彼ガ) 壁ニ | 体重ヲガ |
| (3) (彼ガ) 肩ニ | たすきヲガ | (13) (彼ガ) 新聞ニ | 圧力ヲガ |
| (4) (彼ガ) あごニ | ひもヲガ | (14) (彼ガ) 秤ニ | 荷物ヲガ |
| (5) (彼ガ) 首ニ | 花輪ヲガ | (15) (彼ガ) 顔ニ | めがねヲガ |
| (6) (彼ガ) 手首ニ | 数珠ヲガ | (16) 彼ガ | いすニ腰ヲ |
| (7) (彼ガ) 窓ニ | カーテンヲガ | (17) (彼ガ) 河ニ | 橋ヲガ |
| (8) (彼ガ) 肩ニ | 手ヲガ | (18) (彼ガ) 屋根ニ | 梯子ヲガ |
| (9) (彼ガ) 梯子ニ | 足ヲガ | (19) | 空ニ月ガ |
| (10) (彼ガ) こんろニ | 鍋ヲガ | (20) | 空ニ虹ガ |

これらの特徴は、 $N_2 \cdot N_3$ が具体物で、両者が一部分接して
あり、 N_3 の重みか N_2 にあずけられていることである。

N_2 は、「どこに？」という質問の答えになることができる。す
なわち、場所をあらわしているのである。従って、 N_2 と N_3 の
接している点を含んで、範囲を広くも狭くもとることができる。
例えば(2)の N_2 なら、「家」「玄関」「玄関の軒」、さらにその玄
関の軒にとりつけた「釘」でもよい。

これらの特徴から、この類を<設置>と呼んでおく。<設
置>類は、「置く」「据える」などと、また特に、「つるす」「さげる」「
ぶらさげる」のような動詞と類義語のグループをなす。従って、
「はずす」「とる」などと反義関係にたつ。

(12)(13)は、 N_3 が抽象化されている。また、(11)(13)は、 N_2 が
抽象的なものへ移行している。よって、(13)は動作そのものが
もはや具体的ではなくなっている。(19)(20)は比喩的な表現で
あり、自然現象のため自動詞表現しかない。

(17)(18)の場合には、 N_3 の両端が何かに接している必要があ

る。(18)ではその一端を N_2 があらわしているが、(17)の N_2 はその両端の間にあるものをあらわし、 N_3 と接してはいない。

(21) 彼は 向こう岸に 橋を かけた。

(22) 彼は A村から B町に 橋を かけた。

(21)は、(18)と同様、 N_2 が一端をあらわす例、(22)は接している両端が示されている例である。もともと、〈設置〉には、対象物かどこかから N_2 の位置へ移動することが前提とされる。従って N_2 は、「机の上に本がある」という文における「場所」と異なり格助詞「へ」を伴うことができる(「かける」の場合のみ)。(17)(18)にみられる方向性は、この性質に基く。

(16)は、「かける」のみの例である。「腰かける」という語をあることからわかるように、「腰をかける」全体で、ほぼ「すわる」に相当する意味をもつ。この意味で用いるには、 N_3 の名詞に「腰」以外のものはきわめてとりにくい。つまり、名詞と動詞との結びつきが固定化して特定の意味をあらわすようになっているのである。この、より強い結びつきをなしているものを「idiom化」したものと呼ぶことにする。(3.2.参照)

以上の他、次のようなものが〈設置〉に基く用法であると考えられる。(25)-(27)は、「固定」へ意味がずれている。

(23) 針ニ 魚ガ

(24) レーダー網ニ ジェット機編隊ガ

(25) (彼ガ) 小包ニ ひら ヲ/ガ

(26) (彼ガ) 泥棒ニ なわヲ/ガ

(27) (彼ガ) 金庫ニ 鍵ヲ/ガ

(28) (彼ガ) 車ニ グレーキヲ/ガ

(29) (彼ガ) 舞台ニ 「助六」ヲ/ガ

(30) (彼ガ) エンジンヲ/ガ

(31) a.(彼ガ) プレーヤーニ レコード ヲ/ガ

b.(彼ガ) バートーバン ヲ/ガ

- c.(彼ガ) ステレオヲガ
 (32)a.(彼ガ) ラジオヲガ
 b.(彼ガ) NHKヲガ
 c.(彼ガ) 野球中継ヲガ

(30)-(32)c.は、興味ある問題を含むが、詳述は避ける。

2. 2. <情報の移動>

- (1) (彼ガ) 彼女ニ 声ヲガ (4) (彼ガ) 彼女ニ 宛合ヲガ
 (2) (彼ガ) 彼女ニ 電話ヲガ (5) (彼ガ) 相手ニ 玉手ヲガ
 (3) (彼ガ) 彼女ニ 仕事ノ口ヲガ (6) (彼ガ) 試合ニ ストップヲガ

これらの特徴は、一般にN₁が人間で、N₂が音声手段による情報をあらわし、N₂がN₁からN₂へ伝達されることをあらわしている点である。この類を<情報の移動>と呼ぶ。

この類では、次のように「N₁が」を

- (1') a. 彼から 彼女に 声を かけた。
 b. 彼から 彼女に 声が かった。

「N₁が」に置き換えうる。しかもbのように「かかる」の場合でさえも顕在化されうる。これは、動作主であるN₁が、同時に情報の移動の起点であることによる。

このうち、(2)は到達可能な範囲が広く、「東京から北海道に」のような表現も可能である。

2. 3. <面的接触>

- (1) (彼ガ) 車ニ シートヲガ (7) 山ニ 霧ガ
 (2) (彼ガ) 車ニ おおいヲガ (8) 月ニ 雲ガ
 (3) (彼ガ) 料理ニ ソースヲガ (9) (彼ガ) 本箱ニ ニスヲガ
 (4) (彼ガ) 顔ニ 砂ヲガ (10) 彼ガ 茶碗ニ 湯ヲガ
 (5) (彼ガ) 花ニ 水ヲガ (11) 彼ガ 敵ニ 攻撃ヲガ
 (6) 本ニ ほりヲガ

これらは<設置>に似ているが、接触が面的であり、重みをあずけることのない点で異なる。この類を<面的接触>と

呼んでおこう。一般に、 $N_2 \cdot N_3$ は具体物で、 N_3 は平たいものか粒状かあるいは液体・気体である。

接触が面的であるため、 N_3 が N_2 (の一部) を随う状態になりうる。2. 4. <状態変化>と比較されたい。

(6)-(8)は、自然現象もしくはそれに準ずる人為的でないことがらをあらわす。もちろん、(6)の場合も特定の文脈では

(6) 彼が 本に ほこりを かけた。

と言えないことはない。

2. 4. <状態変化>

- | | | | |
|--------------|----------|---------------|---------|
| (1) (彼が) 床柱ニ | みがき ヲガ | (7) (彼が) 服ニ | アイロン ヲガ |
| (2) (彼が) 板ニ | かんな ヲガ | (8) (彼が) 床ニ | 雑布 ヲガ |
| (3) (彼が) 鎖ニ | やすり ヲガ | (9) (彼が) 商品ニ | はたき ヲガ |
| (4) (彼が) 服ニ | ブラシ ヲガ | (10) (彼が) 服ニ | ボタン ヲガ |
| (5) (彼が) 髪ニ | ドライヤー ヲガ | (11) (彼が) 彼女ニ | 催眠術 ヲガ |
| (6) (彼が) 髪ニ | パーマ ヲガ | (12) | 病気ニ 彼女ガ |

これらは、 N_3 を(道具として)用いることによって、 N_2 に何らかの状態の変化をもたらすという共通点をもち、この類を<状態変化>と呼ぶことにする。

N_3 は、(1)(6)(11)のように道具そのものでないこともあるが、状態の変化をひきおこす点は変わりが無い。(10)は、「固定」の意味である。2. 1. の(8)もここに含めうる。(12)は、 N_3 が人間で非意図的な動作である。 N_2 も他と異なり具体物でない。別の類とするべきかもしれないが、状態の変化をあらわす点では共通なので、ここにあげておく。

この類では、一般に、 N_3 が N_2 の表面に接触して移動する、という動作を、他動詞「かける」が含み、自動詞「かかる」は状態の変化の完了をあらわす。「かけた」ならば、動作自体の完了とともに状態の変化もあつたことになる。

2. 5. <心理的な負担>

- (1) (彼が) 彼女ニ 苦勞ヲが (4) 彼が 彼女ニ 心配ヲが
 (2) (彼が) 彼女ニ 迷惑ヲが (5) 彼女ニ 責任が
 (3) (彼が) 彼女ニ 望みヲが (6) 彼が 彼女ニ 思いヲ

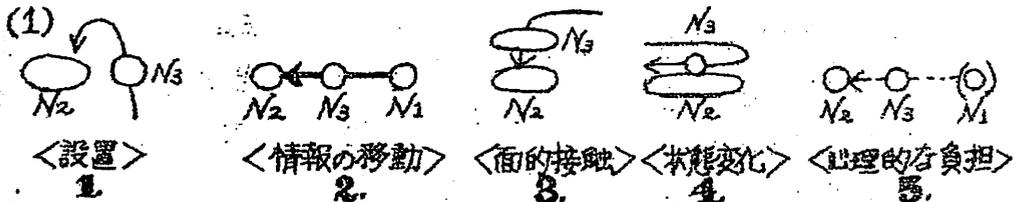
N_3 が心理的なもので、 N_2 がその影響をうける人間であるものを一類としてまとめてみた。〈心理的な負担〉と呼ぶ。

N_1 は N_3 の原因／責任者である人間を示す。(2)では「 N_2 がヲかける／かかる」と表現することができる。 N_1 が言わば「 N_3 の移動の起点としてとらえられるのである。他の例では「 N_1 がヲは言いにくい。これは N_3 が「迷惑ヲまき散らす」のように人間と切り離されたものとして扱われうるか否かによると思われる。

この類は、2. 1.の(13)にあげた「圧力をつける／がかかる」のような用法に似ている。 N_3 の抽象化が心理的なものに限定され、 N_2 は人間に限定されるが、抽象化の点では相通する。

2. 6. 比較整理

以上、2. 1.~5.にあげた類についてまとめてみよう。まずそのあらわす動作を図式化すると、



のようにあらわされよう。図の矢印は、前提となっている何らかの移動をあらわす。2.のみ太い矢印なのは、この移動が動作そのものに含まれていなければならないからである。5.は抽象的なため矢印は破線となっている。

2.では移動が必須であるため、その起点となる N_1 が必要である。5.の N_2 は重視されない。括弧はその意味である。他の三つでは N_2 の位置は重要でない。外から働きかけているだけである。

1.の矢印は、いったんある位置を通りすぎてから少しもど

すという(「ひっかける」というような)動きを示したつもりである。比較してみるとわかるように、2.~4. は1.の動作のバリエーションである。

それぞれの特徴をもう少し整理してみる。

(2)		N ₁	N ₂
<設置>	1	人間[動作主]	具体的[場所]
<情報の移動>	2	人間[動作主・起点]	具体的 人間/ところ [場所/受け手]
<面的接触>	3	人間[動作主]	具体的[場所]
<状態変化>	4	人間[動作主]	具体的[場所/変化物]
<心理的な負担>	5	人間[原因]	具体的人間 [受け手]

	N ₃	動作
1	具体的 [対象物]	具体的 へ ₁ かける動き 点的接触
2	音声情報 [移動物]	具体的 移動到達
3	具体的 [対象物/道具]	具体的 面的接触
4	具体的 [対象物/道具]	具体的 接触のくり返し 状態変化
5	抽象的 心理的 [対象物/移動物]	抽象的 心理的な負担が加わる

[]はN₁~N₃が動詞のあらわす動作において果たす役割を示す。・でつながれたものは同時に両方の役割であることを表わし、/の方はどちらかであることを示す。動作のところでは、主としてN₂とN₃の関係に着目して整理した。

もとより充分な整理ではなく、それぞれの特徴的な面を強調してまとめたにすぎない。しかし、2.~4.が1.から派生したものにとらえうることは、上記の整理からもわかるであろう。個々の用例についてみれば、それぞれの中間的なものと考えられるものも多い。多義語のなかでも「かかる・かける」がとらえにくいのは、この連続的なつながりのためである。

3. その他の用法について

上の分類にはいりきらないが何らかの類をなしうるような用例と、各類にもそれぞれ存在する可能性のある idiom 化し

た用法を示しておくことにしたい。

3. 1. 類をなしうると思われる用法

- (1) (彼ガ) 調度 = 金ヲガ (3) (彼ガ) 仕度 = 手間ヲガ
(2) (彼ガ) 読書 = 時間ヲガ

これらは、*ハ*ガが抽象的で金額や時間に限定される。具体的な動作は表わさず、「必要とする・費す」の意味をもつ。

- (4) (彼ガ) 品物 = 税金ヲガ (6) (彼ガ) 彼女 = 賞金ヲガ
(5) (彼ガ) 彼女 = 保険ヲガ

上の例にも似ているが、「課す」という意味あいをもつ。

- (7) (彼ガ) 登山 = 命ヲガ (10) (彼ガ) 試合 = 勝敗ヲガ
(8) (彼ガ) 仕事 = 地位ヲガ (11) 彼ガ 競馬 = 金ヲ
(9) (彼ガ) 日本チーム = 優賞ヲガ

「賭ける」とか「懸ける・懸かる」の意である。(6)はおしりこちらの類かもしれない。ある一点にあるものを託すという意味で
2. 1. からの派生と考えてもよいであろう。

- (12) (彼ガ) 5 = 3ヲガ (13) (彼ガ) めす = おすヲ

「かける」が用いられるのがふつうである。これらは「5ト3
(ト)ヲかける」と表わすこともでき、対称動詞のひとつであると
考えられる。

- (14) 彼ガ 仕事に かかる。

これは「かかる」が、意志的な動作として使用される特異的な
例である。次のような言い方も可能であることに注目されたい。

- (15) 彼ガ 木を 切りに かかる。

つまり、「〜=」のところに「木を切る」という文をとることが
できるのである。「〜=」にはいるのは意志的な動作を表わす文か、
あるいは動作名詞でなければならない。

3. 2. idiom 化した表現

より硬い結びつきをなすようになると、語順も固定化して

くる。以下に例をあげ、右に装定化のテストをしたものをあ
 げる。装定化されたものが言えないのは、より硬い結びつき
 をなす名詞と動詞とが切り離され、両者の結びつきがもって
 いる特殊な意味がとらえられなくなってしまうからである。

- | | | | |
|----------|-----|--------------|-----------|
| (1) いすに | 腰を | かける。 | ×いすにかける腰 |
| (2) 声が | 鼻に | かかる。 | ×声がかかる鼻 |
| (3) 彼女に | 目を | かける。 | ×彼女にかける目 |
| (4) 彼女に | 手を | かける。(「なぐる」意) | ×彼女にかける手 |
| (5) 美しさを | 鼻に | かける。 | ×美しさをかける鼻 |
| (6) 彼女を | 手塩に | かける。 | ×彼女をかける手塩 |

例えば、(2)は結びつきの強い名詞と動詞とでひとつの単純
 自動詞(「へに」をもとらない自動詞)のはたらきをしている。(1)
 (3)(4)は「へに」をとる自動詞、(5)(6)は単純他動詞のはたらきをし
 ていると考えられる。

さらに特殊なものになると、ある特定の連語あるいは特定
 の形態でしかあらわれない。以下に列挙する。

- (7) (彼が) AトB(ト)ニ 二股ヲ/ガ
- (8) 彼ガ AトB(ト)ヲ ほかりニ
- (9) 後足で砂をかける(ようなしうち)
- (10) お目にかける
- (11) 思いがけない、思いもかけぬ
- (12) (～から～に)かけて
- (13) (母校の名誉に)かけて(も)
- (14) 歯牙にもかけない
- (15) (～に)輪をかけて
- (16) かさにかかって
- (17) ～とかけて(～ととく)
- (18) 腕により. をかける
- (19) (将棋の腕に)かけて(は)

(20) 食ってかかる

(21) お目にかかる

4. おわりに — 残された問題点

ここまで「かかる・かける」の用法を大観してみた。整理しきれなかった用例を以下にかかげて、この論を終えることにしたい。3であげたものや以下のものをどう扱っていくかが今後の課題である。

- | | |
|--------------------|------------------|
| (1) (彼ガ) 熊ニ わなヲガ | (6) 彼ガ 空地ニ 小屋ヲ |
| (2) (彼ガ) わなニ 熊ヲガ | (7) 動詞ニ 名詞ガ |
| (3) (彼ガ) パテンニ 彼女ヲガ | (8) 彼ガ 試験ニ やまヲ |
| (4) (彼ガ) 彼女ニ A療法ヲガ | (9) (彼ガ) 彼女ニ 声ヲガ |
| (5) 船ガ 風ニ 帆ヲ | (註をもちかける意) |

このうち(5)は現在ではまれな用法である。

この論で示したものは、未だ充分なものではない。多義語のそれぞれの用法類を、類義語と比較することも考えたが、適当な類義語をみつけにくいものもあり、分析にもりこむことができなかった。方法の模索の面でもなすべきことはまだ多いのである。格文法的なみかたも機械的な作業で片付く問題ではないので、今後の考察をまちたい。

<参考文献>

文化庁 『外国人のための基本語用例辞典(第2版)』 1975(昭50)

大蔵省印刷局

国立国語研究所 『分類語彙表』 1964(昭39) 秀英出版

宮島達夫(国立国語研究所) 『動詞の意味の記述的研究』

1972(昭47) 秀英出版

森田良行 『基礎日本語』 1977(昭52) 角川書店

<言語経歴>

1952(昭27)年5月愛知県生まれ。1才~22才名古屋。23才~東京在住。